

「身体に支えられる言語 —音声言語習得における身体的基盤—」

江尻桂子 教授

茨城キリスト教大学 文学部児童教育学科

生後 1 年間の音声発達において最も重要な変化は、月齢 6~10 カ月頃に見られる規準喃語 (/bababa//mama/) の出現である。従来、規準喃語の開始を予測する運動発達の指標の一つとして、研究者らによって注目されてきたのは、リズムカルな運動の発達（足を蹴り出す、手を上下に振るなど）であった (Locke, et al., 1995 など)。しかし、詳細なデータは示されていなかった。こうした問題意識のもと、発表者は乳児を対象とした縦断的実験および観察を行い、各乳児において喃語の出現期にリズムカルな運動がピーク期を迎えることを確認した (Ejiri, 1998)。さらに、規準喃語の出現前の時期に、発声とリズムカルな運動が頻繁に同期して生じること、そして、この同期現象が喃語出現後の時期には消失していくことを明らかにした (江尻, 1998a; 1998b)。また、リズムカルな運動の詳細な分析から、音声とリズムカルな運動の同期が生ずるのは、乳児の発声と身体運動を司る運動制御システムが、まだ未分化な状態にあることを意味するのではないかと推測された (Ejiri & Uchida, 2006)。また、音響分析の結果、身体運動と同期した音声は、同期しなかった音声に比べて、規準喃語の音響的特徴をより備えた音声であった (江尻・正高, 1999, Ejiri & Masataka, 2001)。このことから、身体運動が伴うことで発語器官の迅速な運動が助けられ、それによって上記のような特徴を持つ音声生成が促されたのではないかと推測された。これまでの乳児の音声発達研究において、規準喃語は発語器官の運動によって生じる自己受容感覚と、それに伴う聴覚フィードバックとのマッチングを通して習得されることが強調されてきた。しかし一連の研究結果をふまえ、規準喃語の習得は聴覚—発声系のみには依拠して行われるわけではなく、そこに身体的基盤を考える必要性があるのではないかと推測された。